

■ 昭和55年度緊急発掘調査報告書

袋井市長者平遺跡

1 9 8 1

静岡県袋井市教育委員会

袋井市長者平遺跡

1 9 8 1

静岡県袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は、昭和55年7月23日～昭和56年3月31日に実施した静岡県袋井市豊沢地内に位置する長者平（ちょうじゃびら）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、長者平遺跡内での茶園改植に伴い国および静岡県の補助金を得て袋井市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、吉岡伸夫、永井義博（袋井市教育委員会）を発掘担当者として静岡県教育委員会文化課の指導を得て行われた。
4. 本書の執筆・編集は永井義博が行った。
5. 出土遺物の整理作業は早川保子、白井洋子、寺田妙子、内山笑子が担当した。本書で使した挿図は永井義博、早川保子が作成し、遺構・遺物写真は永井義博が撮影した。
6. 本書で使した古墳の墳丘測量図は、同志社大学学生、焼津中央高等学校郷土研究部OBの諸君が作成した資料である。
7. 縄文土器の整理では山崎克己氏（磐田市立郷土館）から数々のご教示を得た。
8. 昭和55年度の発掘調査資料は袋井市教育委員会が保管している。
9. 本調査に関する事務は袋井市教育委員会社会教育課職員が行った。

目 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 調査の経過	2
第3章 調査の方法	2
第4章 調査・整理体制	3
第5章 地理的環境・歴史的環境	4
第6章 遺 構	5
第1節 古墳時代の遺構	5
第2節 縄文時代の遺構	10
第7章 遺 物	13
第1節 長者平古墳出土遺物	13
第2節 長者平遺物出土の陶質土器	14
第3節 長者平遺跡出土の縄文時代遺物	21
第4節 伝・丹生神社古墳（長者平20号墳）出土遺物について	23
第8章 まとめにかえて	24

挿 図 目 次

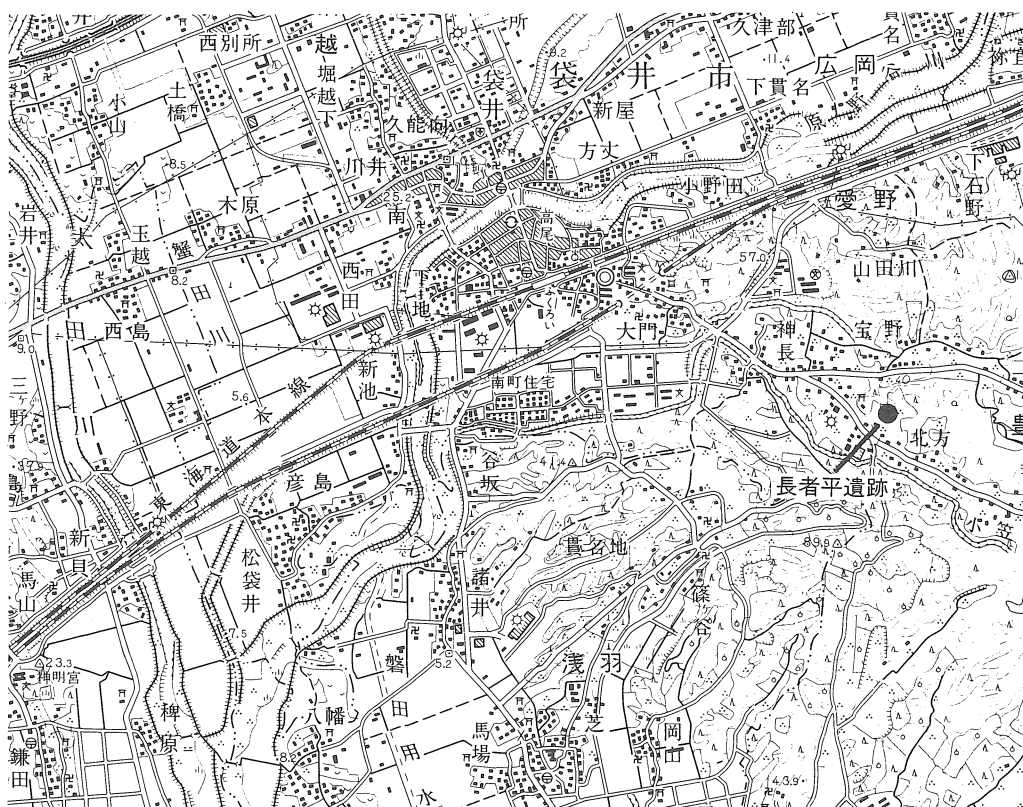
第1図	長者平遺跡位置図	1
第2図	長者平古墳群分布図	2
第3図	長者平古墳群調査状況図	3
第4図	昭和55年度調査区実測図	5
第5図	3・7トレンチ古墳検出状況実測図	6
第6図	丹生神社古墳（長者平20号墳）墳丘測量図	7
第7図	宇佐八幡宮古墳墳丘測量図	8
第8図	宇佐八幡宮2号墳墳丘測量図	9
第9図	八王子神社古墳墳丘測量図	9
第10図	S I 1 実測図	10
第11図	S I 2 実測図	10
第12図	昭和55年度発掘調査区全体図	11
第13図	長者平古墳群出土遺物実測図	14
第14図	長者平遺跡出土遺物実測図	15
第15図	伝・丹生神社古墳（長者平20号墳）出土遺物実測図	15
第16図	長者平遺跡出土土器拓影図	16
第17図	長者平遺跡出土土器拓影及び遺物実測図	17
第18図	各地出土の二段透しの器台	25

表 目 次

第1表	長者平遺跡出土遺物に関するデーター表	18
-----	--------------------	----

図 版 目 次

- 図版 I (A) 長者平遺跡遠景
(B) 長者平遺跡遠景
- 図版 II (1) 長者平古墳調査開始
(2) 主体部発掘開始
(3) 前 溝 部 検 出
- 図版 III (A) 長者平古墳群トレンチ全景(東より)
(B) 第2トレンチ検出古墳主体部
- 図版 IV (A) 古墳主体部と側壁根石(東より)
(B) 古墳前溝と根巻石(東より)
- 図版 V (A) 第2トレンチ検出溝跡(西より)
(B) 第1トレンチ検出溝跡(西より)
- 図版 VI (1) 調 査 開 始
(2) セクションベルトを残して掘り下げ
(3) セクションベルト撤去後
- 図版 VII (4) 遺物出土状態
(5) 遺 構 精 査
(6) 写真撮影準備
- 図版 VIII (A) 南区完掘状況(北より)
(B) 南区検出古墳周溝と主体部
- 図版 IX (A) 南区検出土壌群
(B) 南区検出住居跡
- 図版 X (A) 北区検出土壌群
(B) 土 壌 検 出 状 況
- 図版 XI (A) 炭化物出土状況
(B) 土 壌 検 出 状 況
- 図版 XII (A) 出土土器 —第16図1～4—
(B) 出土土器 —第16図5～12—
- 図版 XIII (A) 出土土器 —第16図13～28—
(B) 出土土器 —第16図29～48—
- 図版 XIV (A) 出土土器 —第17図49～63—
(B) 出土石器 —第17図73～78—
- 図版 XV (A) 出土石器 —第17図 79 —
(B) 伝・丹生神社古墳(長者平20号墳)出土遺物

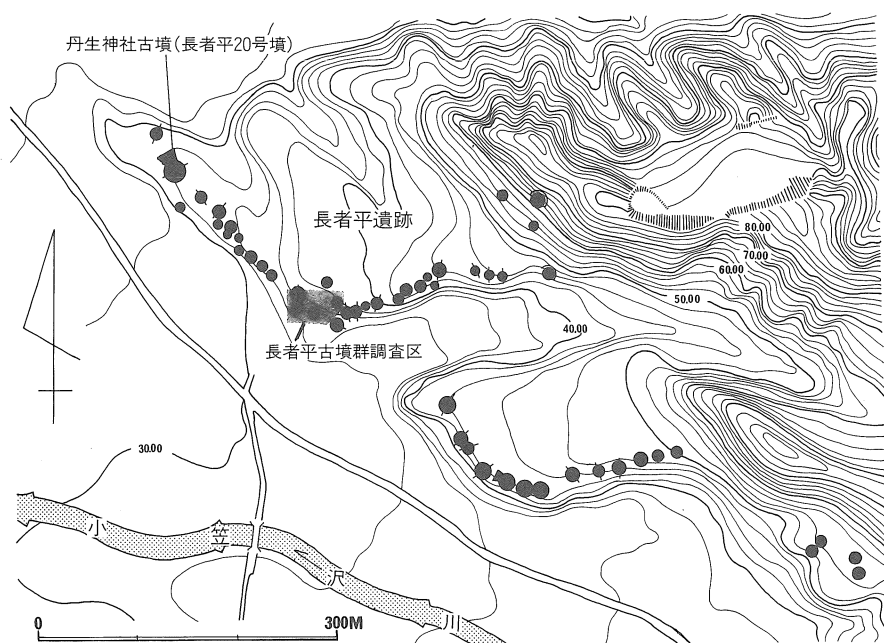


第1図 長者平遺跡位置図

第1章 調査に至る経過

袋井市教育委員会は昭和53年から袋井市豊沢地区において茶園改植に伴う長者平遺跡の緊急発掘調査を実施してきた。これは近年のお茶の高品質化により在来茶から次々と新品種に植え替えられ、これに伴ない耕作土の天地がえしが重機によって地中深くおこなわれてきた。これは、豊沢地区に分布する長者平古墳群の存亡をかけるとともに縄文時代中期の集落跡として著名な長者平遺跡の破壊という状況であった。幸い豊沢地区の方々の文化財に対する深いご理解と全面的なご協力によって、本年度も無事発掘調査を実施することができ、さらに住居跡検出地点はユンボを使わずそのまま埋め戻していただき、わずかではあるが部分的遺構保存をすることができた。これも茶園の地主の皆さん（早川克一氏、早川輝雄氏）をはじめご家族の方々隣家の方々のおかげと深く感謝するしだいである。

本年も発掘調査の事務手続をはじめ調査上の問題点等について細部にわたって熱心な指導をしてくださった静岡県教育委員会文化課の助言はたいへん有益であった。



第2図 長者平古墳群分布図

第2章 調査の経過

7月23日 発掘調査開始。南区から幅1mのセクションベルトを残して掘り下げる。まず茶園の耕作土から除去をはじめる。表土から次々と縄文土器片が出土し、この畑はかなり深くまで耕作されている可能性がある。

7月30日 一部のグリットで包含層が確認できる深さにとどく。出土遺物は若干の石器以外はほとんど土器片のみである。

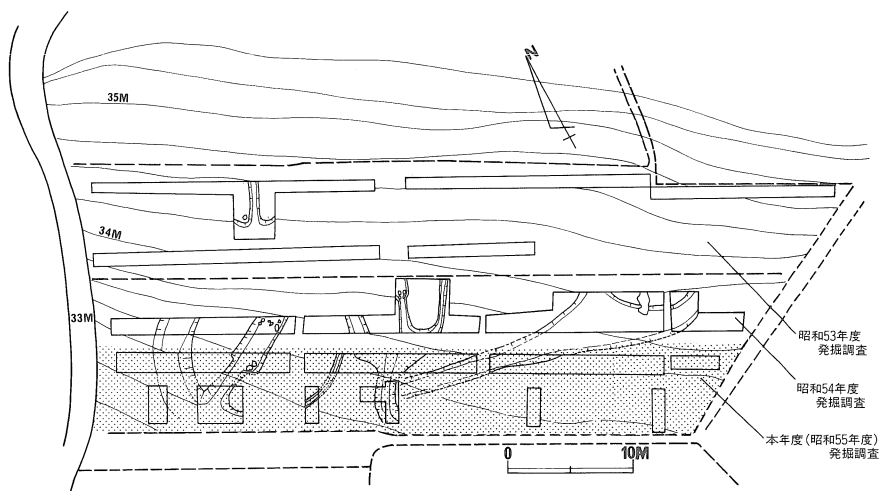
8月8日 南区の写真撮影及び実測。さらに南斜面の古墳の調査も開始する。

9月4日 北区の調査開始。南区の実測と埋め戻しのため調査が中断したが北区も同じグリット法で調査を行なう。あいかわらず土器片が多い。

9月22日 写真・実測も終了して埋め戻し。調査を完了する。

第3章 調査の方法

発掘調査は53・54年度に使用された調査グリットを援用するかたちで設定され、レベル等もベンチマークより移動させ使用した。本調査区のグリットは1辺5mの方形グリットで遺耕実測・遺物取り上げの基本単位である。縦軸は北から南へ1・2・3……、横軸は西から東へ向ってA・B・C……とし、各グリットの名称は縦軸、横軸を組み合わせで表記される。今回の調査区は昨年度の調査からすでに全面遺構があることが想定されたためトレンチ調査はやめて、最初から全面調査に入った。縦横のグリットラインにあわせて格子状に幅1mのセクション・



第3図 長者平古墳群調査状況図

ベルトを残し分層発掘を行った。各グリットは4×4mの調査区となり、最終遺構面まで掘り下げた後セクション実測を行ないさらにベルトを撤去して精査するという方法をとった。南斜面の古墳群は昨年度から継続の地区であるが基本ラインが改植時に失われてしまったため、新たにラインを設けてトレンチを設定した。東西方行が基本トレンチとなるが確認精度を上げるために10m間隔で南北方向のサブトレンチを設定し遺構・遺物にあたったところは巡次拡張してその全容を解明するのに努めた。遺構名称は竪穴住居跡、土壇状遺構、柱穴、溝跡について確認されたものから順次通し番号を付して呼び（第1号住居跡→S I 1、土壇1→S K 1、柱穴1→Pit 1、溝1→S D 1）、これらの遺構以外のものは便宜的に遺構名称をつけた。

現地図面は全体図を20分の1縮尺とし、詳細図が必要な場合は10分の1縮尺図とした。記録写真はアサヒペンタックス6×7、ニコンF2(35mm)を使用しフィルムはネオパンSSと、フジカラー(35mmスライド)を使うことにした。

第4章 調査・整理体制

調査指導機関 静岡県教育委員会文化課 指導主事 山下 晃

調査実施機関 袋井市教育委員会 教育長 山崎 恭一

社会教育課長 松本 長平

社会教育係長 長沼 宣男

文化財係 吉岡 伸夫

永井 義博

現地調査参加者 早川 保子、仲根よし子、寺田ひで子、鈴木みずえ、浅井 征江

早川喜久枝、松田 すが、寺田せつ子、伊藤 みさ、寺田 松枝

名倉 保子、樽松 光子、早川はるみ、早川 はま、鈴木 咲子

前田 庄一、寺田 辰朗

第5章 地理的環境・歴史的環境

小笠山の西北山麓は大きく広がる開折谷が西に向って伸び、原野谷川が流路を大きく変える変換点を形成する要因となっている。袋井市内の支流河川は2つのタイプがあり、ひとつは後背湿地の水を集める小藪川・蟹田川・弁財天川などで、もうひとつは丘陵地の水を集める中沢川・馬込川・小笠沢川・法多沢川・三沢川などである。このうち小笠沢川をはじめとする小笠山丘陵を流れる河川は砂礫質の谷底平野を流れるために伏流水となり、ふだんは川に水の流れは見られないのが特色となっている。しかし山裾には数ヶ所湧水があるようで、人間が生活するのに水に困るということはないようである。

長者平遺跡はこのように広がる丘陵上の南向きのゆるやかな斜面に東西に細長く広がる縄文時代中期初頭から始まる大集落である。現在のところ、この地域で最初の文化の出現がこの長者平遺跡で竪穴住居跡、土壌群から縄文時代後期後半の土器を出土している。このように当遺跡は縄文遺跡として著名であるがこれは遺跡内に広い茶園を所有しておられた故早川二二氏の採集資料のおかげでもある。早川氏は農作業のおり出土する土器片、石器等を丹念に拾い集められ、その量はミカン箱に3杯ほどもあったとのことである。この採集品は石鏃、石錘、石斧縄文土器などや、直刀、勾玉、金環などの古墳出土品など多種・多彩でいる。これらの採集資料は地元研究者のみならず樋口清之、岡本勇氏等の知るところとなり国学院大学の学生諸君をはじめ多くの人々の知るところとなった。その後、昭和53年、昭和54年と二ヶ年に亘って袋井市教育委員会により発掘調査されば遺跡の概要が確認されている。周辺の縄文時代遺跡には山本遺跡がある。ここは長者平遺跡の下を流れる小笠沢川上流の丘陵南面の茶畑である。表採遺物としては石鏃、石匙、石錘があるが遺跡の性格等についてはまだ明らかになっていない。

弥生時代の遺跡は本地域（小笠沢川上、中流域）においてはまだ発見されていない。弥生時代遺跡群の中心は原野谷川に面した丘陵・微高地・自然堤防上に愛野向山遺跡、地蔵ヶ谷遺跡掛の上遺跡、大門Ⅰ～Ⅲ遺跡が散在しており河川との関連を示している。

古墳時代に入ると総数200基をこえる高塚墳と、60基を数える横穴が中心となって丘陵各地は一大古墳群となっている。これらのうち、地蔵ヶ谷古墳群・金山古墳群・雲座古墳群は木棺墓を主体としており副葬品は比較的少ないのが特徴で5世紀後半から6世紀中頃にかけて築造されたと考えられている。6世紀中頃には、鏡・馬具等を含む多量の遺物出土する大門大塚古墳が丘陵上に現われてくるが、その他の古墳では現在までのところ質・量とも乏しい内容となっている。集落跡として調査されたものは調査範囲が広いとその全容をつかむに至っていないが、掛の上遺跡・大門Ⅰ遺跡・三門遺跡等が確認されている。6世紀中頃以降になると、古墳群の築造と平行して横穴墓が隆盛となる。地蔵ヶ谷横穴墓群が著名であるが、これらは古墳と墓域を同一、または近接する位置にある。横穴式石室を内部主体とする小笠沢川流域の長者平古墳群・駒ヶ谷古墳群・山本山古墳群等が築造を開始するのもこの時期である。長者平古墳群は丘陵南斜面を中心に東西700m、総数50基からなり、丹生神社境内と長者平遺跡北側の2

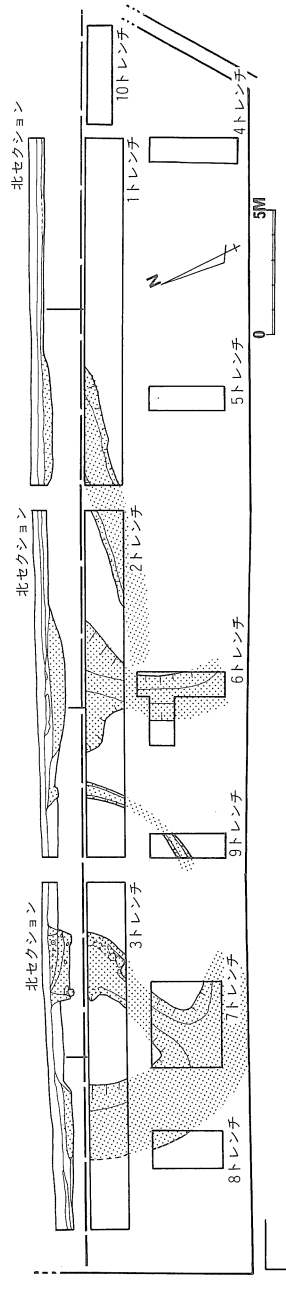
基の前方後円墳を中心に直径10～20mの円墳群より構成されている。

第6章 遺 構

今回の調査は長者平遺跡の丘陵上385㎡と、南斜面の315㎡が対象である。これらは共に昨年度調査された発掘調査区に隣接しており縄文時代中期から古墳時代にかけての遺構・遺物が予想された。基本土層は 第Ⅰ層 暗褐色土層（厚さ20～25cmで縄文時代中期から古墳時代中・近世、現代までの遺物が混在する。茶園の耕作土となっている。）第Ⅱ層 黒色泥質土層（厚さ5～15cmで丘陵南面では一南斜面一厚く推積しており縄文時代、古墳時代・中世の遺物が混在している。）第Ⅲa層 暗褐色砂礫混り土層（厚さ5～15cmの縄文時代包含層。）第Ⅲb層 黄褐色砂礫混り土層（厚さ5cm未満で第Ⅲa層から遺跡基盤層にかけての漸移的な色調をなすが、砂礫はⅢa層に比べ弱い。相対的に多くの縄文時代遺物を包含する。第Ⅲa層とともに縄文時代の主要な遺構覆土。）第Ⅳ層 黄褐色礫層（遺跡基盤層。小笠山礫層。無遺物。）の推積を示している。南斜面は流れ込みの土層が各所で見られ推積状況は一定しない。

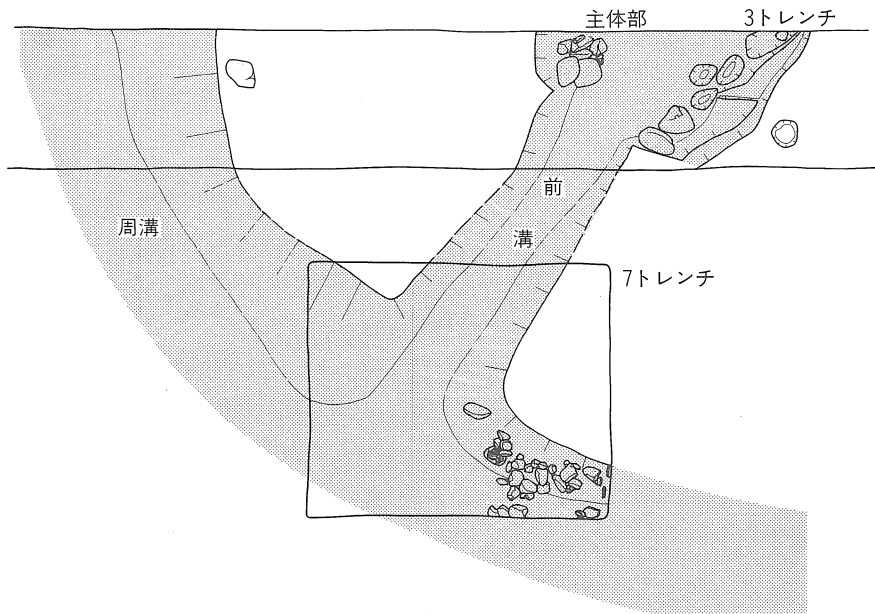
第1節 古墳時代の遺構

遺構 今回の調査では2基の古墳及びにその一部とみられる遺構が出土している。丘陵上の調査区南端で検出された古墳は径12mの円墳の北側半分である。茶園造成のため墳丘は削平され周溝底部と主体部の一部が残るのみである。主体部はすでに盗掘済で掘り方内部は茶園から出た石が詰め込まれていた。主体部掘り方の幅は1.4mを計る。周溝は確認面での幅1.2m～2.0mで深さは15cm～20cmの数値である。南斜面の調査区では1基の古



第4図 昭和55年度
調査区実測図

墳が検出されている。3トレンチの中央では円墳の主体部と西側の周溝の一部が検出されている。南側の7トレンチでは同じ古墳の前溝部が検出されている。この円墳は昨年度の調査で主体部の北側と周溝がトレンチ内で検出され昭和54年度第1号墳の名称で報告されている。この中でのデータは、直径約12m、主体部幅2.1m、主体部深さ0.6mの小円墳で幅3.3mの周溝を巡らせており主体部裏ごめ土と根石の抜き取り痕から見て横口積の石室であったとのことであ



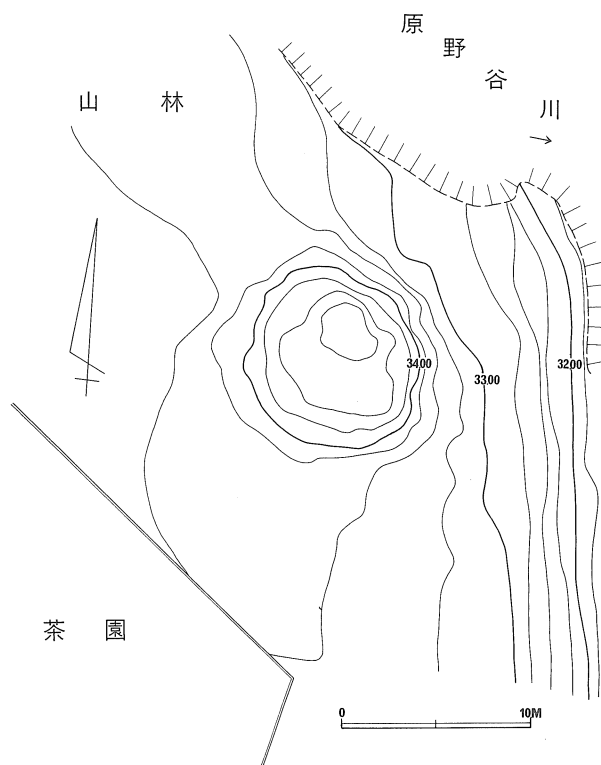
第5図 3・7トレンチ古墳検出状況実測図

る。その他の遺構として溝状遺構が1・2・6・9トレンチより検出しているがトレンチ調査のためその全容を知ることにはできない。周溝または墓道の可能性を持つ遺構が見られる。

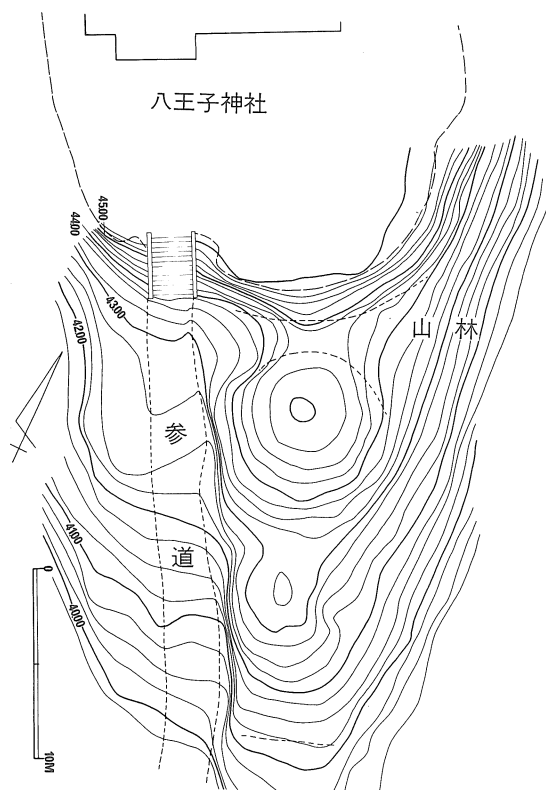
長者平古墳群の中での位置 今回の調査で発掘された小円墳は丘陵南端に広がる長者平古墳群の中央付近でこれらのグループの中核となるのが丹生神社の境内に位置する長者平20号墳である。この古墳は全長30m、後円部径18m、前方部幅17m、後円部高2.4m、前方部高1.8mをりり北西に面する古墳であった。平面形は前方部が大きく開き、その幅が後円部径にほぼ等しいプランは後円部の一部と前方部の角をそれぞれ破壊されてはいるがはっきりと知ることができる(第6図を参照)。袋井市内には遺跡地図によると8基の前方後円墳が発見されている。このうち墳丘測量図が作成されているものは袋井市北原川の宇佐八幡宮境内にある前方後円墳である。この古墳も全長30mクラスであるが東側を流れる原野谷川により墳丘裾部をかなり削り落され後円部も土取りで失なって形を崩している(第7図を参照)。この前方後円墳も10m前後の円墳を数基伴っているが茶園等の改墾により残された円墳は宇佐八幡宮本殿の裏山に残された宇佐八幡宮2号墳のみである(第8図を参照)。もう1基墳丘測量図の作成されているのは袋井市三川の八王子神社の参道脇にある。これは前方後円墳と言われた古墳であったが、これを前方後円墳と見ると全長20mクラスとなってしまう円墳2基の可能性も考えられる(第9図を参照)。市内にはこのような30mクラスの前前方後円墳とそれより後出する円墳群からなる古墳群が各丘陵に分布しておりその他著名なものは三川・川合坊主山古墳、国本・浅間山古墳、同、権現山古墳などがある。このうち川合坊主山古墳は敷地川水系の有力古墳で、複数の粘土槨からなる内部主体は変形獣文鏡ほか2面の鏡と直刀、管玉などを出土しており、墳丘からは円形・朝顔形の埴輪が発見され、破壊された断面には葺石も見られるとのことである。



第7図 宇佐八幡宮古墳墳丘測量図



第8図 宇佐八幡宮2号墳墳丘測量図



第9図 八王子神社古墳墳丘測量図

第2節 縄文時代の遺構

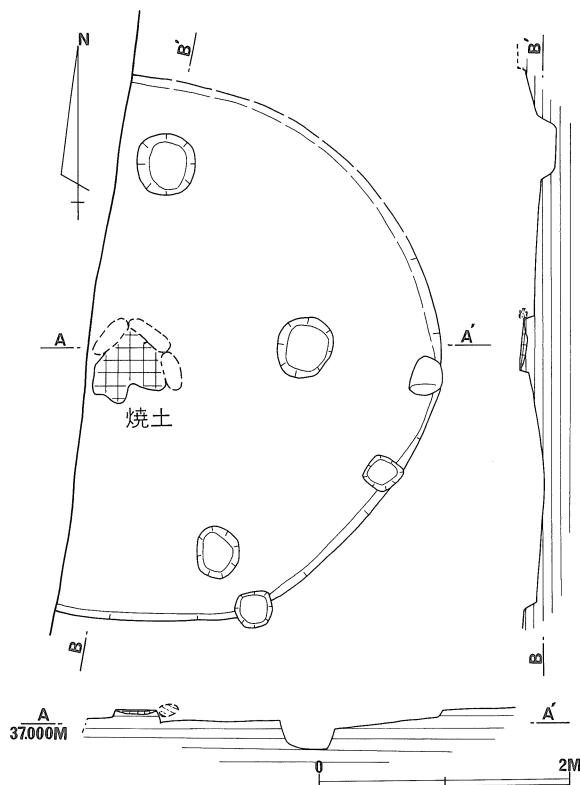
遺構 今回の調査では竪穴住居跡またはそれに類似する遺構は2軒検出されている。また不定形の土壇と Pit は多数検出されているが、茶の木の抜き取り痕がかなり深くまで入り遺構を攪乱している。各遺構の確認面はかなり下で、住居跡、Pit、土壇の壁の残りはあまり良好ではない。

S I 1 (住居跡) 調査区南西部分に遺構の東半分が検出されている。この住居跡は石の抜き取り痕の残る炉跡と Pit 3 がはっきりと確認できる。壁は南側にわずかに残るのみで壁溝等も検出されていない。住居跡の直径は推定4.3m、壁高10cm、炉の径40cm、焼土の厚さ5cmでこぶし大の石を用いた石囲炉であったと思われる。Pit は径30～50cm、深さ5～10cmのものが関係すると思われる。

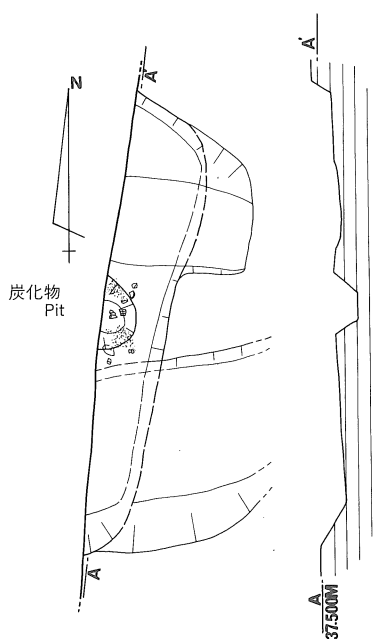
S I 2 (竪穴状遺構) 調査区北西部分に遺構の一部が検出されている。方形の竪穴状の落ち込みと炭化物のつまった Pit からなる遺構でそのほとんど調査区域外で遺構の性格についてはまったくつかめていない。遺構は南北方向は3.7m、壁高10cmを計る。

その他の土壇・Pit 調査区内では土壇約50基、Pit約50基が検出されているがどれも確実に縄文時代の遺構としてとらえられるのは難しく不定形のものが多い。特異な遺物出土する

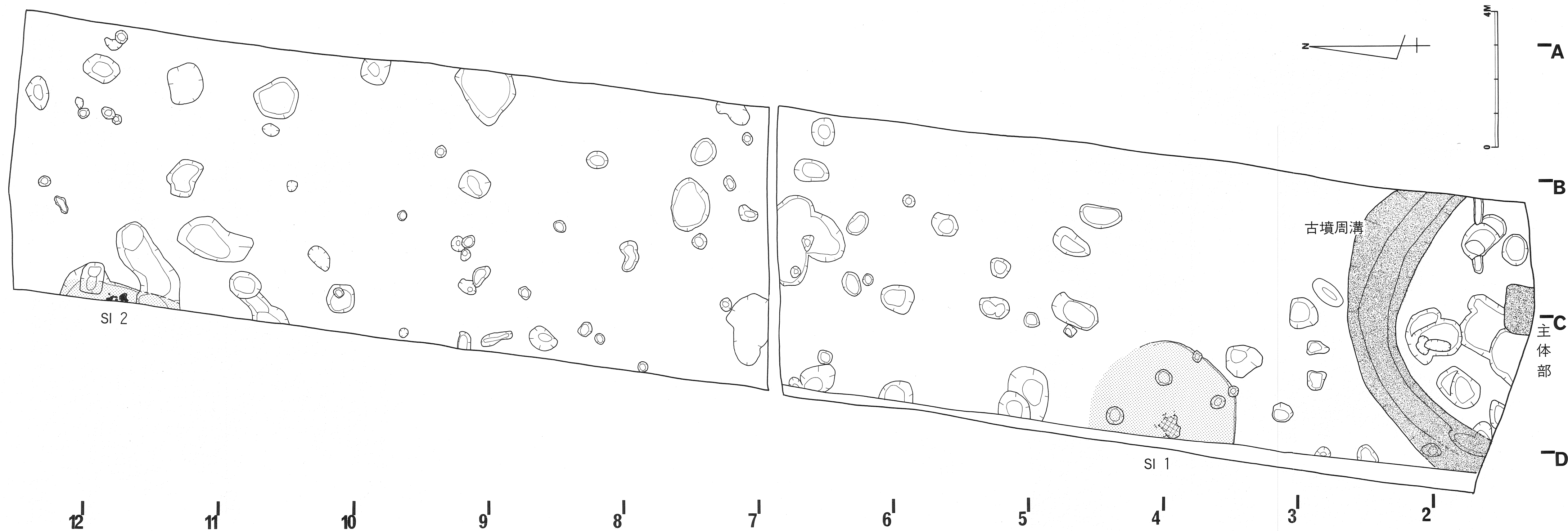
土壇、Pit もなく若干の土器片が混入のみである。



第10図 S I 1 実測図



第11図 S I 2 実測図



第12図 昭和55年度発掘調査区全体図

第7章 遺物

第1節 長者平古墳群出土遺物（第13図—1～12、第14図—1～6）

南斜面の古墳群の調査ではテンバコ2箱分の土器が出土している。ここではこのうち図化できたもの19点を紹介するが第13図—1～11、第14図—4～7は須恵器、第13図—12、第14—1～3は土師器で、その他金属製品は出土していない。

坏身（第13図—1～6、第14図—4・5）

a類（第13図—1～3 第14図—5・6） 口径9.0cm～10.0cmの坏身3点を図示した。遠考研編年の第Ⅲ期中の葉（6世紀の後葉）にあたる遺物である。

b類（第13—4～6） 遠考研編年の第Ⅳ期の前半（7世紀の前葉）にあたる。これらa—b類の坏身は8分の1個体ほどの少片を回転復元しているため実測図に多少の無理が生じていることをご理解願いたい。

蓋（第14図—6）

口径8.5cmの遺物で第Ⅳ期の前半（7世紀の前葉）にあたる。この土器も4分の1個体の小片である。

高坏（第13図—7～9）

7は高坏の脚部で、細い基部から直下によって外反するもので体部には二段にわたって長方形のスカシ窓を二方向に刻んでいる。無蓋の高坏であろう。8は脚部で底形7.5cm、現存高6.5cmを計る。9は口径15.0cm、高さ11.8cm、底径10.0cmでていねいな仕上である。

長頸壺（第13—10・11）

10は口径11.2cmの長頸壺の口縁部で、11は壺の底部である。

土師器高坏（第13図—12、第14図—1）

12は高坏の脚部先端であるが第14図—1の高坏と同一個体である。第14図—2、3も欠損部
土師器脚付埴（第14図—2・3）

この2つの破片も磨耗がはげしく内外面に残るハケメより高坏と異なることがわかる。

以上16点の図化した遺物の出土位置は次のとおりである。まず第4図の発掘調査区実測図を参考に見ていくと第13図—1は7トレンチで検出された昭和54年度1号墳の前溝内の黒色土（覆土）より出土している。第13図—3も同じ古墳の前溝外東側部分にあった礫群から出土している。13図—2と7は3トレンチと位置はやや異なるが同じ古墳のトレンチから検出され特に7は2孔2段スカシを持つ高坏片である。第14図—4・5もこの古墳から出土している。第13図—12、第14図—1の土師器高坏も7トレンチから出土している。

その他の遺物はすべて2トレンチの中央の主体部状の落ち込みに関連したもので、第13図—4～6の坏身はすべてこの落ち込みの覆土（黒色土）内より出土している。第13図—9はこの落ち込みの上層より、第13図—8は坏身と同じ覆土内からの出土である。第13図—10・11もこの黒色土内の出土である。以上のことから、昭和55年度1号墳関連遺物と2トレンチ中央落ち

込み関連遺物を中心に2分された土器群であった。

第2節 長者平遺跡出土の陶質土器（第14図—7～11）

ここに図示した5点は茶園耕作土または表採による遺物が中心となっており、残念ながら遺物と遺構の関連等はつかめていない。

坏蓋（第14図—7）

扁平な擬宝珠状のつまみが付く坏蓋である。奈良時代の遺物である。

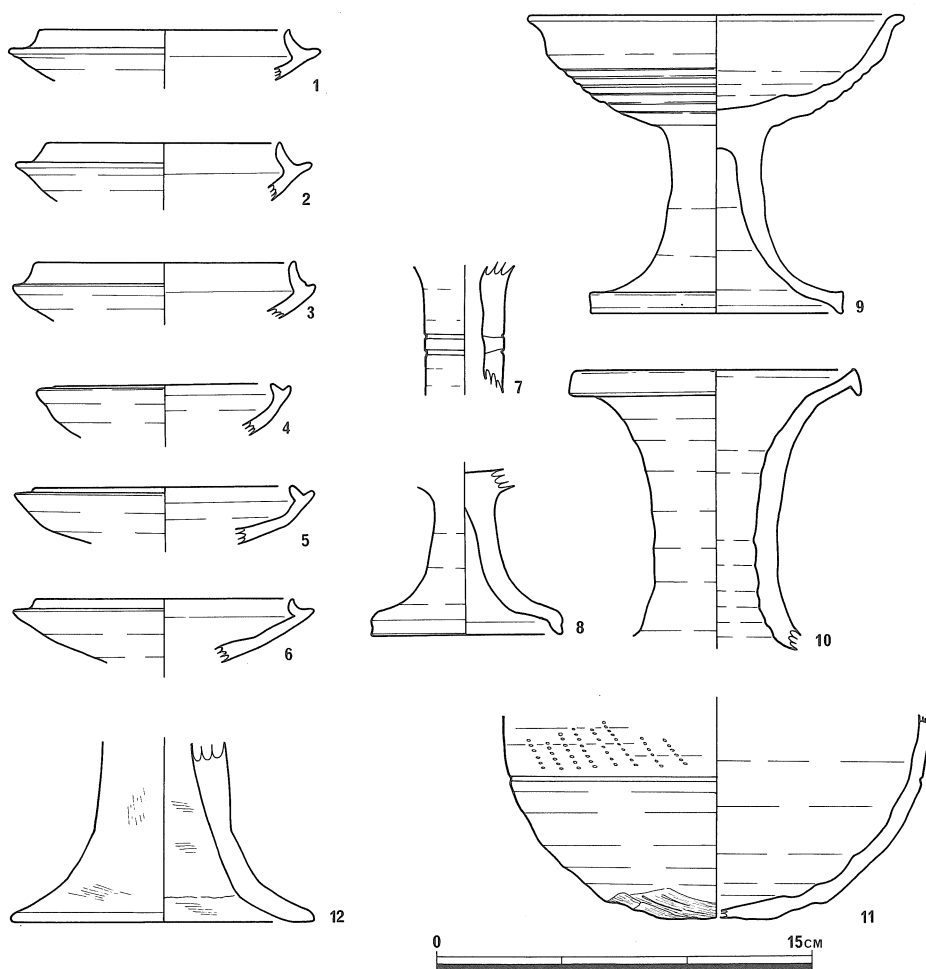
小皿（第14図—8・9）

底部に回転糸切り痕を残す小皿で灯明皿として使われたものである。中世の遺物である。

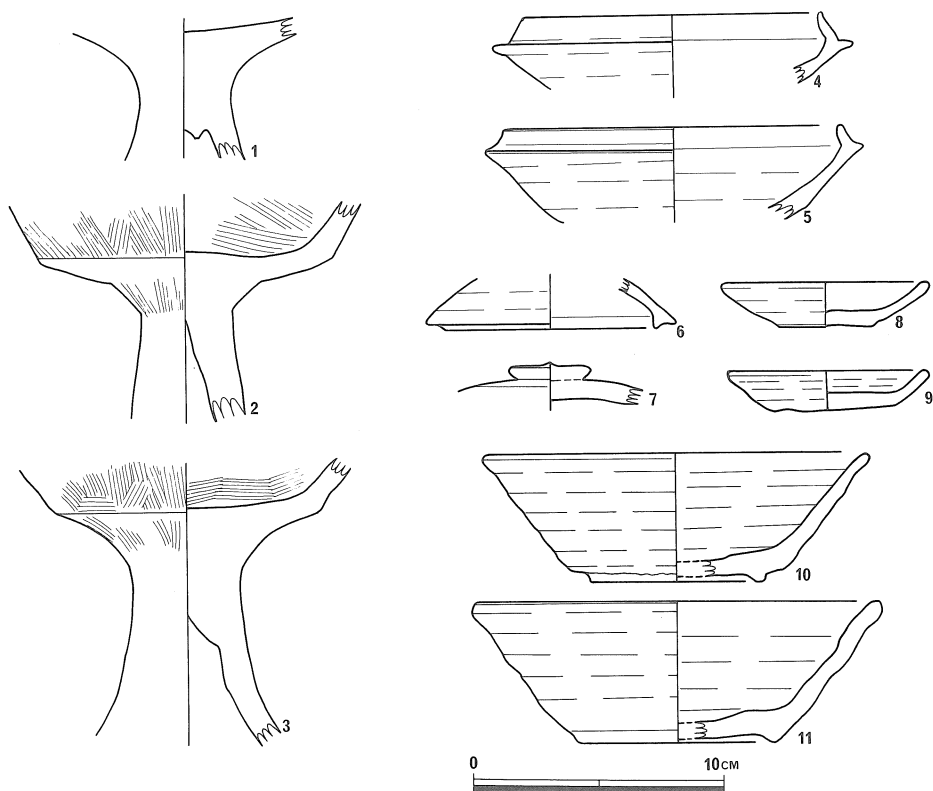
山茶碗（第14図—10・11）

両方とも4分の1個体ほどの小片である。中世の遺物である。

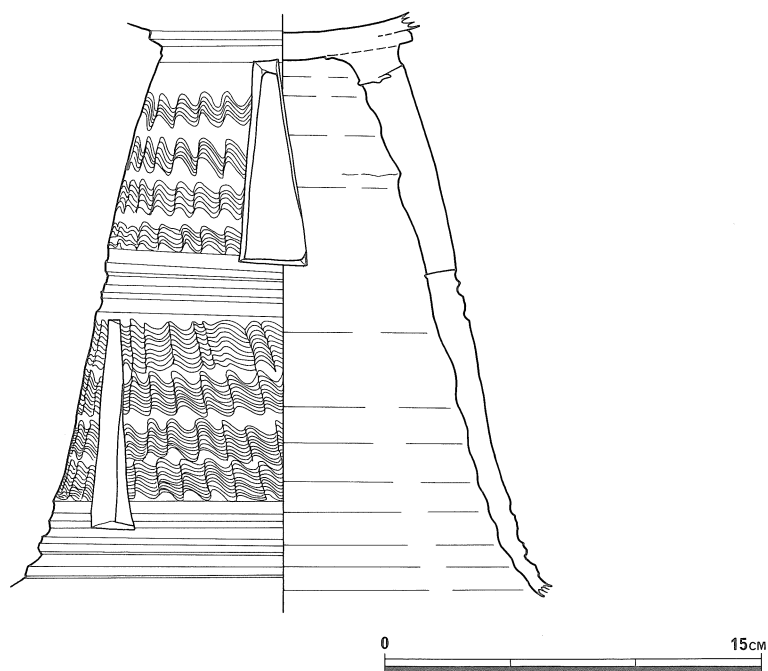
奈良時代、中世の遺物は過去の調査でも若干出土しており掘立柱建物を検出している。



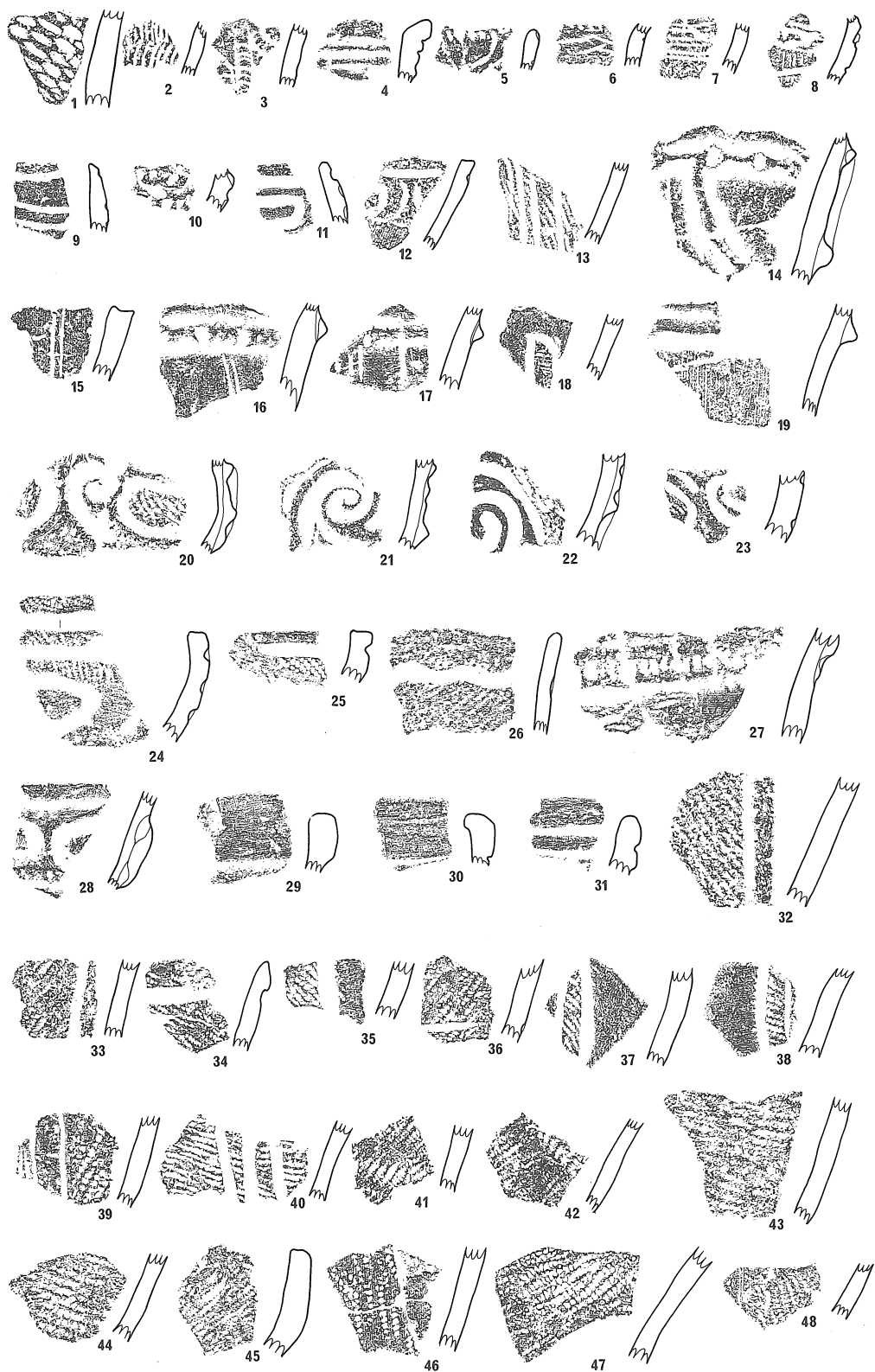
第13図 長者平古墳群出土遺物実測図



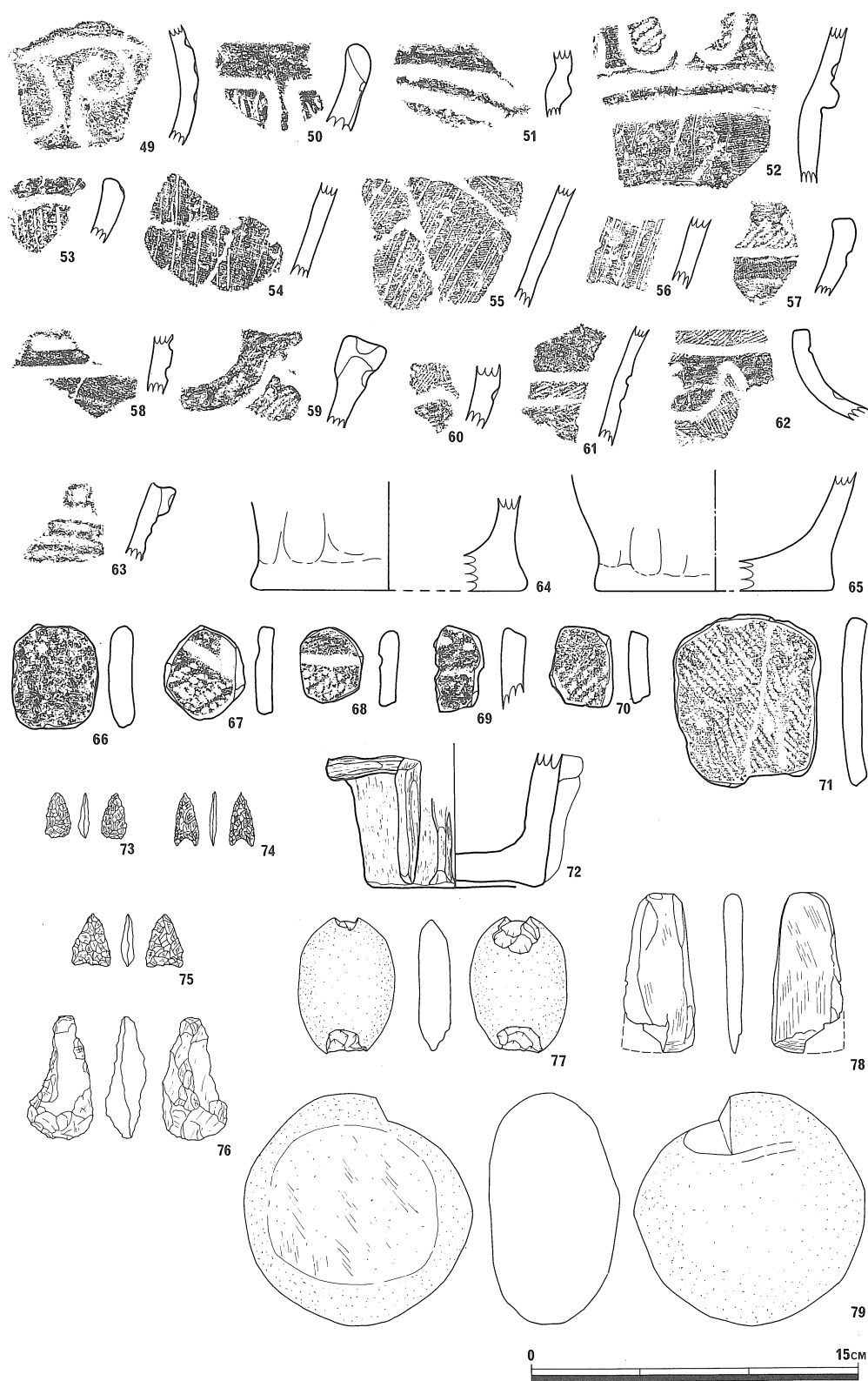
第14図 長者平遺跡出土遺物実測図



第15図 伝・丹生神社古墳（長者平20号墳）出土遺物実測図 —吉岡伸夫氏提供—



第16図 長者平遺跡出土土器拓影図



第17図 長者平遺跡出土土器拓影及び遺物実測図

第1表 長者平遺跡出土土器拓影に関するデータ表

No.	遺物 番号	層 位	色 調	胎 土	焼成	備 考
1	271	C-11 漸 移 層	明 褐 色	長石、砂、雲母、細礫を混入	良好	
2	55	C-3 暗褐色土層	赤 褐 色	長石、砂、細礫を混入	〃	中期初頭・鷹島式土器
3	44	C-1 〃	暗 褐 色	長石、砂、雲母、砂礫混入	〃	中期前葉・北裏C式土器
4	64	D-1 P i t 3	〃	長石、雲母混入	〃	中期前葉・船元系
5	45	D-1 暗褐色土層	淡 褐 色	長石、砂、砂礫混入	良好	咲畑式土器平行
6	30	C-1 表 土	黒 褐 色	長石、砂、赤色粒、砂礫混入	〃	〃
7	115	C-1 暗褐色土層	明 褐 色	粗い長石、細礫混入	良	〃
8	10	C-2 表 土	〃	長石、砂混入	良好	〃
9	277	C-9 漸 移 層	暗 褐 色	〃	〃	〃
10	218	C-7 耕 作 土 下	〃	長石、砂、細礫混入	〃	〃
11	19	C-1 表 土	茶 褐 色	長石、砂混入	〃	〃
12	24	E-1 表 土	〃	〃	良	〃
13	36	C-1 暗褐色土層	〃	雲母、長石わずかに混入	良好	加曾利EⅡ～Ⅳ式土器併行
14	289	B-10 漸 移 層	明 褐 色	長石、赤色粒、砂礫混入	良	〃
15	36	C-1 暗褐色土層	褐 色	赤石粒、長石、砂混入	良好	〃
16	265	B-9 耕 作 土	黄 褐 色	粗い雲母、長石、細礫混入	良	〃
17	71	C-3 暗褐色土層	褐 色	長石、砂礫混入	良好	〃
18	82	B-6 表 土	淡 褐 色	雲母、長石、細礫混入	〃	〃
19	49	E-1 P i t 2	暗茶褐色	長石混入	〃	〃
20	51	D-1 P i t 4	暗 褐 色	粗い長石、雲母粒混入	良	〃
21	64	D-1 P i t 3	暗黒褐色	長石、雲母混入	良好	〃
22	170	表 採	黒 褐 色	長石、赤色粒混入	〃	〃
23	12	D-2 表 下	暗 褐 色	長石、砂礫混入	〃	〃
24	319	A-11 漸 移 層	茶 褐 色	雲母、長石多く混入	〃	〃
25	101	覆 土	暗 褐 色	長石、赤色粒混入	〃	〃
26	8	D-1 表 土	黒 褐 色	長石多く含む	良	〃
27	333	表 採	淡 褐 色	長石粒多く混入	〃	〃
28	193	C-1 暗褐色土層	暗 褐 色	長石、砂礫混入	良好	〃

No.	遺物 番号	層 位	色 調	胎 土	焼成	備 考
29	52	D-1 P i t 5	赤 茶 色	長石、雲母混入	良好	加曾利 E II ~ IV 式土 器併行
30	74	C-5 表 土	茶 褐 色	"	"	
31	52	D-1 P i t 5	暗 褐 色	長石、赤色粒多く含 む	"	
32	44	C-1 暗褐色土層	淡 褐 色	雲母、赤色粒混入	良	"
33	8	D-1 表土下層	"	細礫混入	良	"
34	168	D-1 暗褐色土層	暗 褐 色	長石、赤色粒多く含 む	良好	"
35	168	D-1 "	"	長石、赤色粒混入	"	"
36	22	D-1 表 土	黒 褐 色	"	"	"
37	247	C-9 漸 移 層	暗茶褐色	"	"	"
38	216	C-12 耕 作 土	褐 色	長石、雲母、砂礫混 入	"	"
39	234	C-9 漸 移 層	赤 褐 色	長石、砂礫混入	"	"
40	98	D-6 表 土	褐 色	赤色粒、長石混入	"	"
41	146	D-1 攪 乱	暗 褐 色	雲母、赤色粒含む	"	不明（縄文のみ）
42	82	B-6 表 土	褐 色	雲母、赤色粒		"
43	209	C-10 黒 色 土	赤 褐 色	赤色粒、長石、粒礫 混入	良	"
44	255	B-10 耕 作 土	"	長石、赤色粒、細礫 多く混入	"	"
45	7	C-1 表 土	"	長石、赤色粒混入、 粗い	"	"
46	297	C-7 P i t 36 覆 土	暗 褐 色	雲母、砂礫混入	良好	"
47	221	B-8 耕作土下	暗茶褐色	長石、赤色粒、雲母 砂礫混入	"	"
48	279	C-8 漸 移 層	暗 褐 色	長石混入	"	広野 C 式土器？
49	51	D-1 P i t 4	"	粗い長石、赤色粒、 細礫多く含む	良	加曾利 E II ~ IV 式土 器併行 曾利式土器併行
50	62	D-1 暗褐色土層	"	細礫混入	良好	
51	7	C-1 表 土	淡 褐 色	長石、赤色粒、砂礫 混入	"	
52	174	D-1 P i t 3	赤 褐 色	長石、赤色粒混入	"	"
53	218	C-7 耕作土下	暗 褐 色	長石、細礫混入	良	"
54	63	D-1 P i t 5	"	長石、細礫多く混入	良好	"
55	63	D-1 "	赤 褐 色	長石、赤石粒混入	"	"
56	92	C-5 表 土	黒 褐 色	長石、砂礫混入	"	"

No.	遺物 番号	層 位	色 調	胎 土	焼成	備 考
57	241	C-10 漸 移 層	褐 色	赤色粒混入	良好	後期初頭
58	82	B-6 表 土	明 褐 色	長石、赤色粒混入	〃	称名寺式土器
59	298	B-8 漸 移 層	赤 茶 色	長石、細礫多く含む 粗い	〃	〃
60	258	B-7 〃	茶 褐 色	長石、砂礫混入	〃	〃
61	329	A-11 〃	黒茶褐色	長石、雲母混入	良	〃
62	296	B-7 〃	赤茶褐色	長石混入	良好	〃
63	21	C-1 暗褐色土層	黄 褐 色	長石粒、細礫多く混 入	良	晩期末
64	279	C-8 漸 移 層	〃	長石	良好	中期後半
65	216	C-12 表 土	赤 褐 色	〃	〃	〃
66	244	表 採	明茶褐色	長石、細礫混入、粗 い	良	土器片錘
67	8	表 土	淡 褐 色	雲母、赤色粒、砂礫 混入	良好	〃
68	8	〃	黒 褐 色	長石	〃	〃
69	221	B-8 〃	褐 色	長石混入	〃	〃
70	71	C-3 暗褐色土層	黒 褐 色	長石、雲母わずかに 含む	〃	〃
71	83	C-3 表 土	茶 褐 色	長石、雲母、砂礫混 入	〃	〃
72	205	D-8 〃	赤 褐 色	長石	〃	中期後半、釣手形土 器？

第3節 長者平遺跡出土の縄文時代遺物

昭和55年度発掘調査出土の縄文時代遺物は土器・土製品・石器等でテンバコ5箱分ほどある。今回は土器を6群に分類し、その他土器片・石器等に分けて記述した。

<縄文土器>

第1群土器（第16図—2・3）

中期初頭から前葉の土器をこれにあてる。

2は連続爪形文を施す土器で鷹島式土器の系譜をひくものである。昭和54年度長者平遺跡出土土器の第1群土器にあたり2点出土している。

3は半截竹管による連続爪形文を持つ薄手の土器である。増子康真氏のいう北裏C式土器に類似する土器である。

第2群土器（第16図—4）

4は口縁に平行してやや深めに3条の平行沈線が施された土器で各条幅がやや広がっているのが特徴のようである。中期中葉の船元Ⅱ式に併行するのであろうか。

第3群土器

中期後葉の土器をこれにあてる。

a類（第16図—5～12） 中期後葉の土器の中でも東海地方西部系の土器をこれにあてる。中富Ⅱ式、Ⅲ式、咲畑式土器など考えられるがここでは一括して咲畑式土器併行としてあつかう。昭和53年度出土土器のa類の土器4点、昭和54年度出土土器のc類の土器1点がこれにあたる。

b類（第16図—13～40） 関東系の土器をこれにあてる。加曾利EⅡ～Ⅳ式土器併行を対象とし、昭和53年度出土土器のc類土器22点、昭和54年度土器のd類14点がこれにあたる。

c類（第17図—50・51） 中部高地系の土器をこれにあてる。曾利Ⅲ～Ⅳ式土器併行を対象とし、昭和53年度出土土器c類22点、昭和54年度出土土器e類4点がある。

d類（第16図—48） 天竜川流域に分布する在地の土器である。口縁部・胴部に縦位の結節縄文を施す。広野C式土器と呼ばれる土器で昭和53年度出土土器e類8点、昭和54年度出土土器g類2点がこれにあたる。

e類（第16図—14～47） 縄文のみ施される口縁部・胴部片を一括した。

第4群土器（第17図—57～62）

後期初頭の土器をこれにあてた。

第5群土器（第17図—63）

晩期の土器をこれにあてた。

その他、64・65、72の土器底部は中期後半である第4群土器の範ちゅうに入ると思う。これらの様相から昭和55年度出土土器は前年度の調査の結果を補足し貴重な発見となった。

<土器片錘>

今回の調査では第17図—66～71の6点が出土している。小さなものは68の長径3.4cm～短径2.8cmから大きなものは71の長径7.8cm～短径6.5cmまでさまざまである。土器片を楕円形または方形に隅をおとし、おもに長径両端に溝を入れてある。土器片錘にはおもに、加曽利EⅢ～Ⅳ式土器の破片が使用されているように思われる。

<石器>

今回の調査では181点の石器が出土し、このうち代表的なもの8点を図化した。

石鏃（第17図—73～75）

73は基部調整の挟りがほとんど加えられていない頁岩質の石鏃である、押圧剥離は丹念に加えられており全長2.1cm、幅1.1cm、厚さ0.5cm、重さ0.8gを計る。

74は黒耀石製で基部に深い挟りを入れた無茎石鏃で押圧剥離も非常にいいになっている。全長2.4cm、幅1.1cm、厚さ0.3cm重さ0.5gを計る。

75はやや雑な押圧剥離により仕上げられている比較的大型な石鏃である。頁岩製で全長2.4cm、幅1.7cm、厚さ0.6cm、重さ1.9gを計る。

石斧（第17図—76～78）

76はやや小型の打製石斧で雑なつくりである。全長5.6cm、幅3.0cm、厚さ1.4cm、重さ20.0gを計る。

78は一部を欠損しているがなかなかつくりの良い磨製石斧である。全長7.2cm、幅3.1cm、厚さ0.8cm、重さ25.5gを計る。

石錘（第17図—77）

77は楕円形で扁平な自然礫の長軸両端に溝をつけたものである。材質は砂岩で長軸6.0cm、短軸4.4cm、厚さ1.4cm、重さ61.5gを計る。

たたき石（第17図—79）

79は砂岩の石器で、ちょうど片手で持って物をつぶす、こする、たたくという動作をするのに都合の良い大きさである。とくに片面はかなり使用されたらしく磨耗している。長軸10.5cm、短軸10.4cm、厚さ5.9cm、重さ835gを計る。今後の調査ではこれと対する石皿の発見が望まれるところである。

第4節 伝・丹生神社古墳（長者平20号墳）出土遺物について

丹生神社古墳（長者平20号墳）は、ここ数年来袋井市教育委員会によって調査されている長者平古墳群の盟主墳というべき前方後円墳である。規模は第6図の墳丘測量図で示したとおり全長30m、後円部径18m、前方部幅17m、後円部高2.4m、前方部高1.8mとたいへん小さく最後の前方後円墳の1つであろう。周溝は正確にはわかっていないが古墳北側に、ゆるやかにカーブしながら丹生神社拝殿につづく裏参道がありこれが周溝の痕跡と考えている。ここで紹介する遺物は破壊された後円部あたりで地元住民が採集したとのことである。墳丘測量図でも明らかなように後円部の土取り痕は大きく古墳の主体部付近まで破壊されていた可能性がある。

器台（第15図）

この器台の脚部は現存高22.6cm、脚接合部径9.5cm、現存する脚部の最大径21.5cmを計る灰色で焼成も良好な遺物である。胎土は長石、小礫をわずかに含むが比較的均一な様子を見えている。器台の作成順序は、まず内・外面全体に回転ナデ調整を施した後、6条の櫛描波状文を4段、上部から下部の順に入れている。脚中央に入れられた3本の沈線を棒状工具によるもので突出部にはナデ調整のあとを残している。器台の脚下部も4条の沈線を入れた後、突出部のみヨコナデ調整をし、次にへら状工具により長方形のスカシを2段に明けている。このスカシは内・外面よりへら状工具により切り込まれているが、上・下面は尖頭の工具で刺り切っている。比較的端部の調整はしてあるが、中央部と内面の端部に若干のバリを残している。脚部と坏部の接合部内面は回転を利用しないナデ調整で、坏部側の内面は脚との接合のためのタタキ目残り、それを不定方向のナデで消している。以上、遺物に関するデーターは吉岡伸夫氏のご好意によりここに掲載させていただいた。

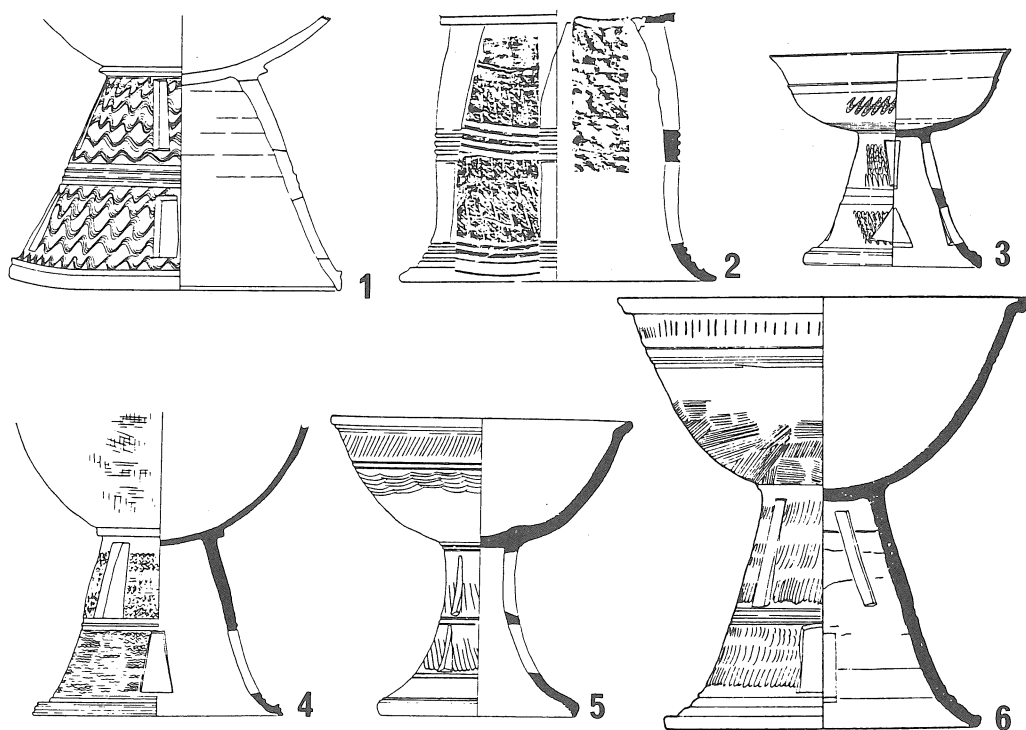
さて、中遠地区における器台を出土する古墳としては、市内高尾にある大門大塚古墳の出土品中と、掛川市下俣の宇洞ヶ谷横穴墳の出土品中の遺物が著名である。大門大塚古墳の器台は口径35.5cm、高さ37.0cm、底径27.0cmの数値をもつ。脚部の調整のみを見ると、脚中央の3本の沈線を境に上下それぞれに3段の櫛描波文が巡っている。スカシは長台形の千鳥透しを穿たれている。宇洞ヶ谷横穴墳の器台は口径25cm、器高24.5cmの大きさである。脚部の調整を見ると、坏部と同じく2本の沈線によって上下2段に区画し櫛描文が施されている。脚部の中段の沈線を境に長台形2段3方透しが穿たれている。焼成は硬質良好で、器面には緑色釉着がみられ、全体の色調は青灰色を呈しているとのことである。これらのことから宇洞ヶ谷横穴墳の器台はスカシが長台形2段の千鳥透しから2段3方透しへの流れと脚部の広がりから大門大塚古墳のものより後出とされている。丹生神社古墳（長者平20号墳）の器台は実測図で見るとおり脚部にかぎっていえば大門大塚古墳の器台に類似するといえるだろう（第18図参照）。

第8章 まとめにかえて

大学を出てまだ日の浅い考古学徒が生まれ故郷を遠く離れて東も西も見当のつかない地方の町にはうりこまれる。そして、これまた初めての縄文の遺跡を掘る。いままで関東ローム層の発掘に慣れていた私にはとんでもない話であったが、幸にも関係者各位の協力とあたたかいはげましにより調査概要をここにまとめるに至った。また、昭和53年度・54年度とこの長者平遺跡の発掘調査をされた吉岡伸夫氏により各年度の概報を作成されていたことにより今年度分の報告書作成の確かな指針となった。それでは、これらの資料等を参考にしながら本年度の調査をまとめてみたい。

- (1) 第16図—1に示したように縄文早期の神宮寺式系の押型文土器とみられる破片が出土した。前年度までの調査では縄文中期初頭の鷹島式土器がこの集落の形成期と考えられ、それ以前にさかのぼる遺物は出土していなかった。袋井市内での早期の遺物は原野谷川をわたった丘陵上の陣屋北遺跡から早期末の茅山式土器と思われる小片が袋井ゴルフ場建設に伴って出土しているが、押型文は初例となってしまう。神宮寺式系土器の県西部での出土例としては加藤賢二氏によって報告された菊川町の三沢西原遺跡がある。この遺跡は牛淵川の河岸段丘上の標高50mの段丘面に位置する縄文～弥生後期、土師器を出土する遺跡であるが、縄文早期の遺物は浸食谷に沿った南縁部からのみ出土している。この報告の中では第1類の15点を神宮寺式系土器とし、片岡肇氏による分類の Ay 及び Bx・By に対比されている。また加藤氏は同じく菊川町の市ヶ原遺跡からの出土品も紹介している。神宮寺式系土器は大阪府交野市神宮寺遺跡を標式遺跡とし愛知県・三重県・長野県から畿内にかけて分布する土器で東限は沼津市清水柳遺跡、長泉町山岸遺跡があげられている。このような状況の中で遠江におけるこの特殊な押型文とみられる土器の出土例の増加はその文化圏を考えるうえで重要な意味を持つことになる。また愛知県知多町の先苺貝塚では、この貝塚形成期より古いと思われる土器として神宮寺式系押型文土器の小片が報告されている。この先苺貝塚は和歌山県田辺市高山寺貝塚を標式遺跡とする縄文早期の押型文土器で著名な高山寺式土器の単純貝塚である。神宮寺式土器はこの貝塚形成より古い2片の土器片のうちの1つとしてとりあげられているが、ここの資料は報告書によると「円形の棒軸に対して直角方向に平行なV字状の溝を数条彫刻した原体を用いて、1回ごとに半段づらして押圧・半回転して施文されたもので……」と片岡氏の研究を引用して説明している。神宮寺式系押型文土器を発生期の押型文土器という前提のもとに見れば、もちろん袋井市最古の土器といえる。さて、出土品整理中に見学に来た数人の研究者から押型文土器ではないかとの指摘をうけた筆者は、神宮寺式土器に詳しい片岡肇先生(平安博物館)に土器の鑑定を依頼した。その結果、片岡先生より残念ながら押型文土器ではないとのコメントをいただいたのでここに訂正して報告するしだいである。出土品整理中に見学にこられた方々にはこのようにご理解願いたい。

- (2) 縄文時代中期の遺物は中期初頭の鷹島式土器から中期後葉の長者平遺跡の最盛期の土器群まで前年度の調査結果をさらに補強する遺物が出土している。住居跡等の遺構が少なく遺構・遺物の関係が押さえられなかったことが残念である。
- (3) 長者平遺跡の南斜面から検出した古墳及び溝状遺構は昭和45年度発掘調査で検出された昭和54年度第1号墳と周溝状遺構のそれぞれの南側の区画にあたる。昭和54年度第1号墳からは6世紀の後葉の遺物が、今年度も出土し、主体部状落ち込み（昭和54年度周溝状遺構）からは7世紀前葉の遺物が出土している。今回の調査により、茶園の中にもさらにたくさん的小円墳が盛土を削平された状態で眠っているものと思われる。
- (4) 長者平古墳群の盟主墳となる前方後円墳である丹生神社古墳（長者平20号墳）から出土したと伝えられる器台を第15図に示し、さらに墳丘測量図についても袋井市内のその他の古墳の測量図とともに紹介することができた。器台についてはP23が詳しいのでここではこの器台の類例を追ってみた。尾張・三河・遠江・駿河等の東海地区では比較的に器台の出土例は少なく、さらに私の手持ちの資料の絶対量が少ないこともあるが第18図に示したものが報告されているものである。1は名古屋市大須二子山古墳出土の資料で脚部底径27.0cmを計るが焼成時のひずみが残り短い部分では24.5cmである。報告では東山11号窯より古い土器と考え、これより古い時期の陶邑産とも考えられるが2段方形透しの器台は陶邑ではほとんど知られていないので三重県南勢地方、または名古屋台地に接する丘陵



第18図 各地出土の二段透しの器台（縮尺不統一）

(①1979、南山大学 ②1979、三渡俊一郎 ③1973、氷見市教委

④1978、芳賀 陽 ⑤⑥掛川市教委より)

で焼かれたかもしれないと考えている。5世紀後半を考えているようである。2は名古屋市千種区城山古墳からの採集遺物である、図がはっきりしないが、脚部の破片での採集品で、脚中央と下端部にそれぞれ4条の沈線を入れ中央から上下に分けた区画では波状文を施している。5世紀後半ごろを考えているようである。3は富山県永見市の朝日長山古墳の出土品である、やや小型で高坏かもしれないが成形・調整方法やこれに合う埴型土器が伴うことから器台とした。6世紀前葉の遺物である。4は豊川市の上野3号墳からの出土品である。5世紀末～6世紀初頭の遺物としている。5は掛川市宇洞ヶ谷横穴墳（墓）出土の遺物でP23に詳しい。6世紀前半をその年代としている。6は袋井市大門大塚古墳の出土品である。これも6世紀前半の年代が与えられている。その他、今回図示はできなかったが1963年に発行された『守山の古墳』の中の「尾張・三河地方における古墳出土須恵器の編年」の中でも、その第二型式の須恵器№16にこの手の器台がのっている。以上のような出土例から丹生神社古墳（長者平20号墳）出土器台も6世紀前葉～中葉にかけてのはやい時期の遺物と考えられ、長者平古墳群の小円墳群（6世紀後半）に先行するかたちで築造されたといえる。第6図の丹生神社古墳（長者平20号墳）クラスの前方後円墳は第7図に示した宇佐八幡宮古墳（袋井市）をはじめ興覚寺後古墳（浜北市）、莊館山1号墳（藤枝市）などが県内では代表的である。

- （5）奈良時代、中世の遺物がわずかに出土している。奈良時代の遺物は54年度に、中世の遺物は53・54年度にもそれぞれ若干数出土しているが絶対量があまりにも少ないため、ここで詳しく触れることはできない。ただ中世の遺物については本丘陵を「長者平」と呼ぶところから長者伝説と結びつけて考える吉岡氏の説があることを付け加えておきたい。

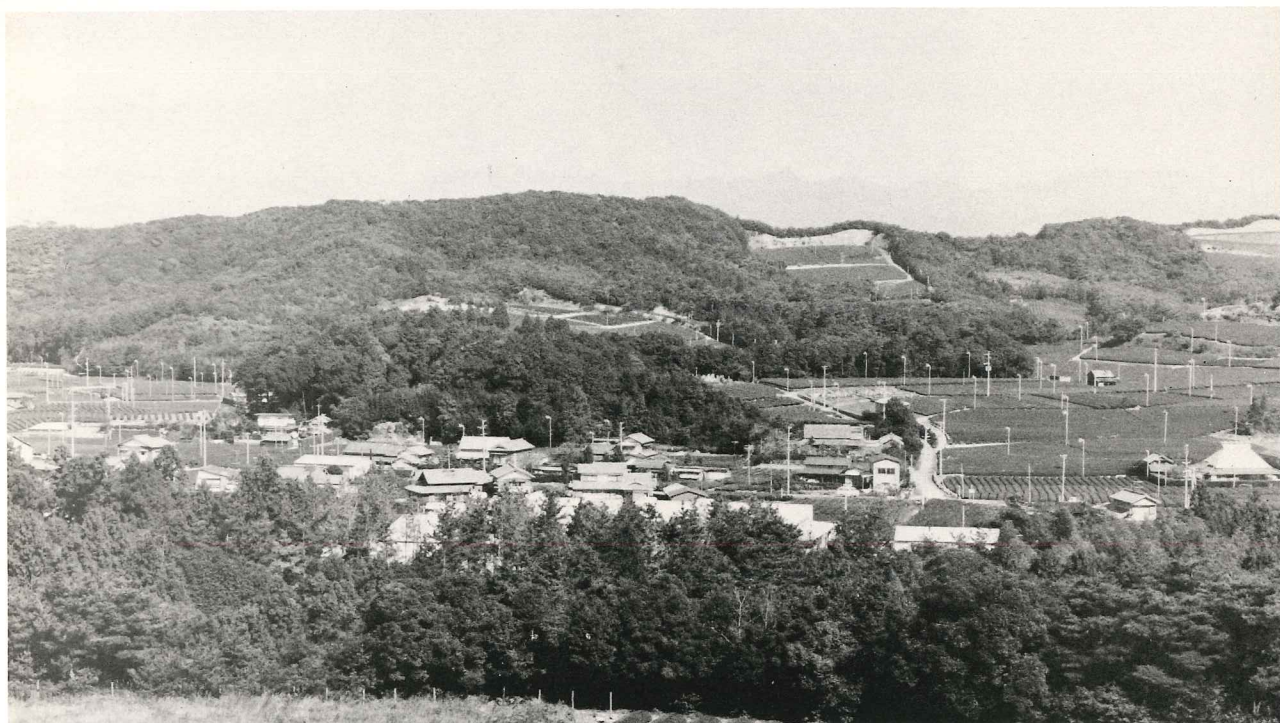
本書の編集にあたって吉岡伸夫氏（袋井市教育委員会）、山崎克己氏（磐田市立郷土館）、片岡 肇氏（平安博物館）、辰巳和弘氏（同志社大学）の協力を得た。資料収集にあたっては、西日本の資料を榎田チェミさん（同志社大学学生）に、東日本の資料を駒沢大学考古学研究室にお願いした。多勢の調査関係者の援助を得てここに報告書が完成したことを記して感謝の言葉としたい。

（袋井市教育委員会 永井義博）

参考文献・引用文献

- 1979 袋井市教育委員会 『長者平遺跡—昭和53年度緊急発掘調査概報—』
1980 袋井市教育委員会 『長者平遺跡—昭和54年度緊急発掘調査概報—』
198 袋井市教育委員会 『長者平古墳群—埋蔵文化財発掘調査報告書—』
198 袋井市教育委員会 『長者平遺跡—昭和5 年度緊急発掘調査報告書—』
1980 加藤賢二 「小笠郡菊川町採集の縄文早期土器」『森町考古15』
1972 片岡 肇 「神宮寺式土器の再検討」『考古学ジャーナル72』
1978 片岡 肇 「神宮式系押型文土器の様相」
『小林知生教授退職記念考古学論文集』 南山大学考古学研究室
1980 南知多町教育委員会 『先苅貝塚』 南知多町文化財調査報告書 第4集
198 菊川町教育委員会 『三沢西原遺跡』
1979 南山大学小林知生教授退職記念会
『大須二子山・南ヶ原・井守塚古墳発掘調査報告』 P 36
1977 安達厚三 「名古屋市長須二子山古墳出土の遺物をめぐって」
『名古屋市博物館研究紀要第1巻』 名古屋市博物館 P 1
1979 三渡俊一郎 「東山古窯址群内出土の須恵質円筒埴輪」
『古代人 35』 名古屋考古学会
1973 氷見市教育委員会 『富山氷見市朝日長山古墳調査報告書』
1974 富山県教育委員会 『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』
1978 芳賀 陽 「東三河における古墳出土須恵器の編年」
『二本松古墳群』愛知県宮開拓パイロット事業石巻地区埋蔵文化財
調査団
1971 静岡県教育委員会 『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告』静岡県文化財調査報告書
第10集
19 辰巳和弘 「各地域における最後の前方後円墳 東日本Ⅰ 静岡」
『古代学研究105』 古代学研究会
19 辰巳和弘 『日本の古代遺跡1 静岡』 保育社
19 袋井市役所 『袋井市史 通史編』
1981 岡崎市教育委員会 『経ヶ峰1号墳』
1979 静岡県考古学会 『須恵器—古代陶質土器—の編年』 静岡県考古学会シンポジウム
1977 藤城 顕 『渥美半島における古墳出土須恵器の一考案』
1966 遠江考古学研究会 『大沢・川尻古窯跡調査報告書』
1970 大塚淑夫 「藤枝市原荘館山古墳発見と保存への経過」
『静岡県考古学会連絡紙4』
1963 守山市教育委員会 『守山の古墳』
1966 豊田市教育委員会 『豊田大塚』

写真図版



(A) 長者平遺跡遠景（南より）



(B) 長者平遺跡遠景（東より）

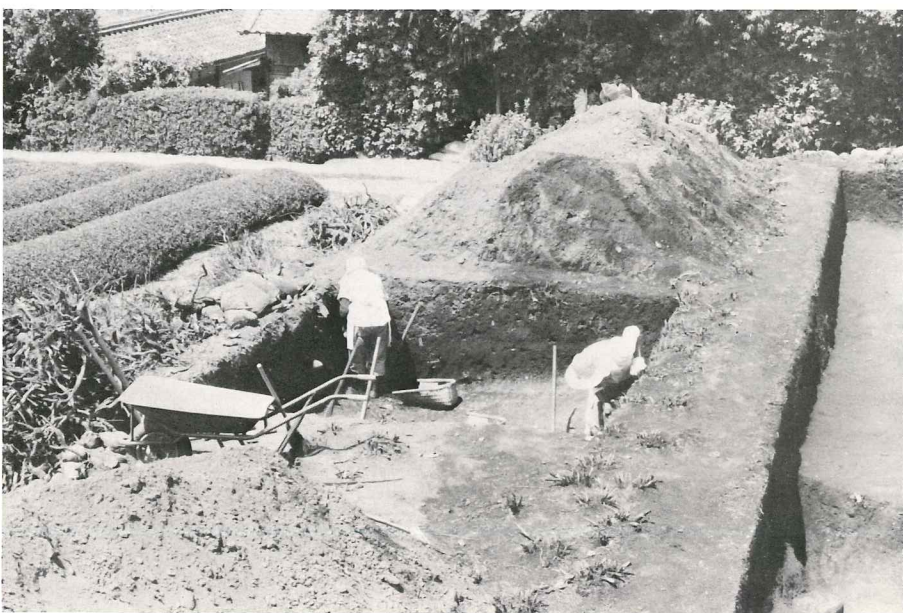
(1) 長者平古墳
調査開始



(2) 主体部
発掘開始

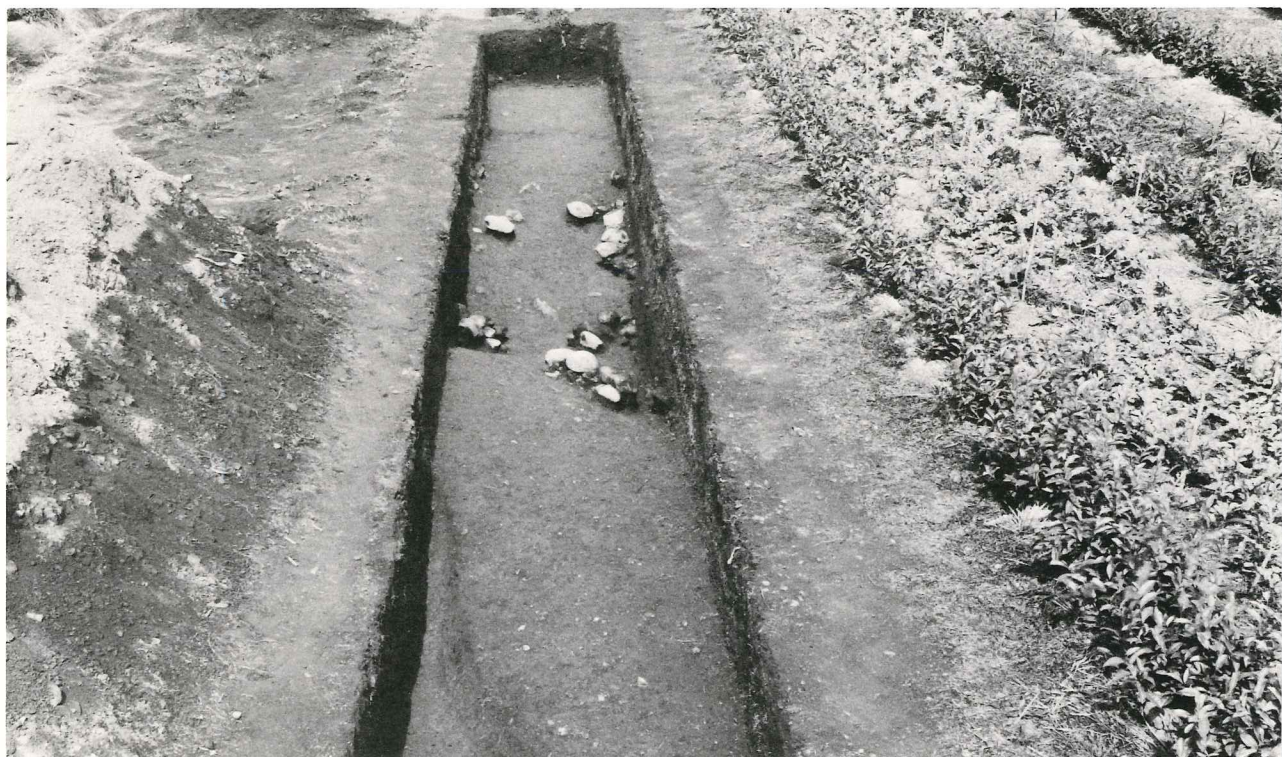


(3) 前溝部
検出





(A) 長者平古墳群トレンチ全景（東より）



(B) 第2トレンチ検出古墳主体部



(A) 古墳主体部と側壁根石（東より）



(B) 古墳前溝と根巻石（東より）



(A) 第2トレンチ検出溝跡（西より）



(B) 第1トレンチ検出溝跡（西より）



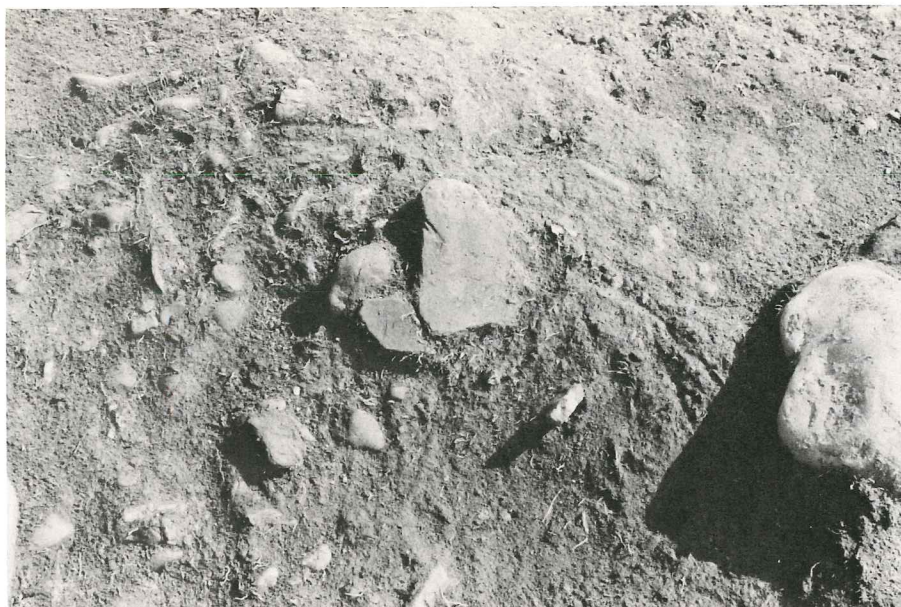
(1) 調査開始



(2) セクションベルト
を残して掘り下げ



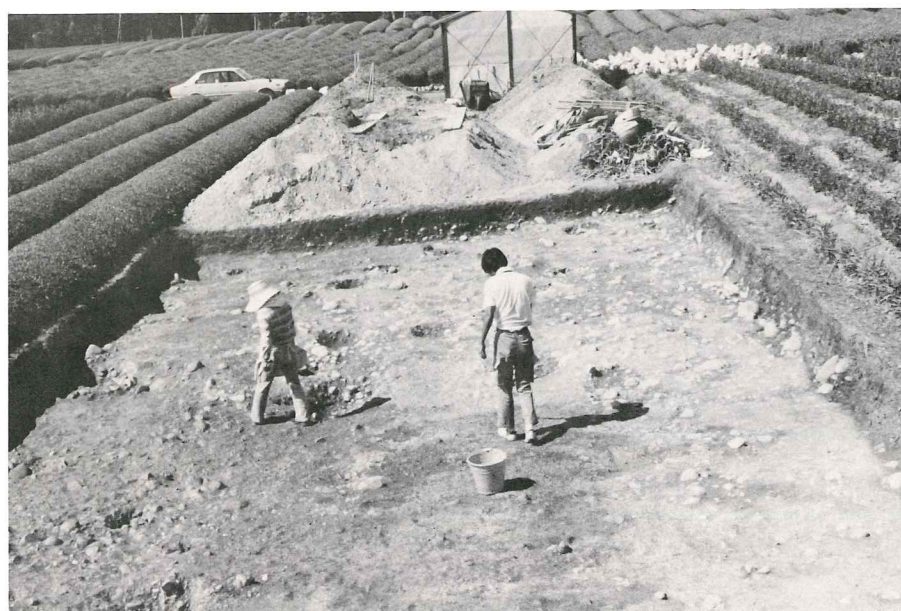
(3) セクションベルト
撤去後



(4) 遺物出土状態



(5) 遺構精査



(6) 写真撮影準備



(A) 南区完掘状況（北より）



(B) 南区検出古墳周溝と主体部



(A) 南区検出土壌群



(B) 南区検出住居跡



(A) 北区検出土壙群



(B) 土壙検出状況



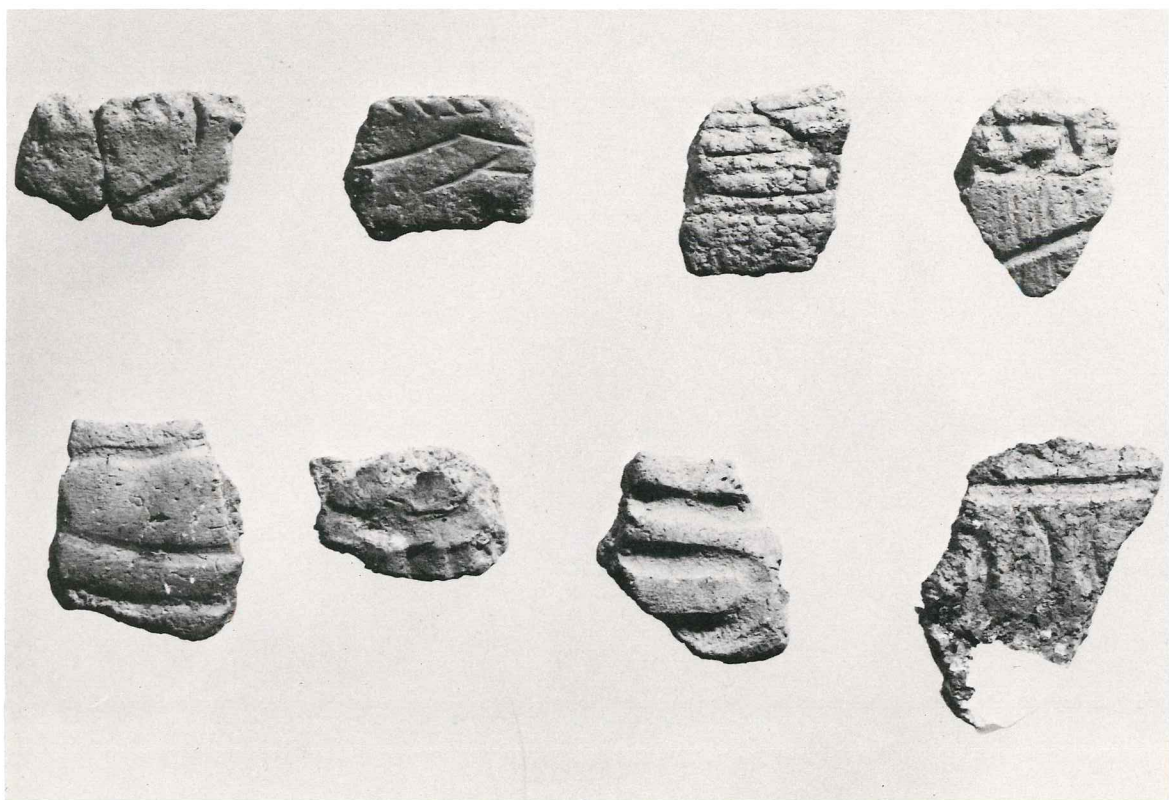
(A) 炭化物出土状況



(B) 土壙検出状況



(A) 出土土器 —第16図 1 ~ 4—



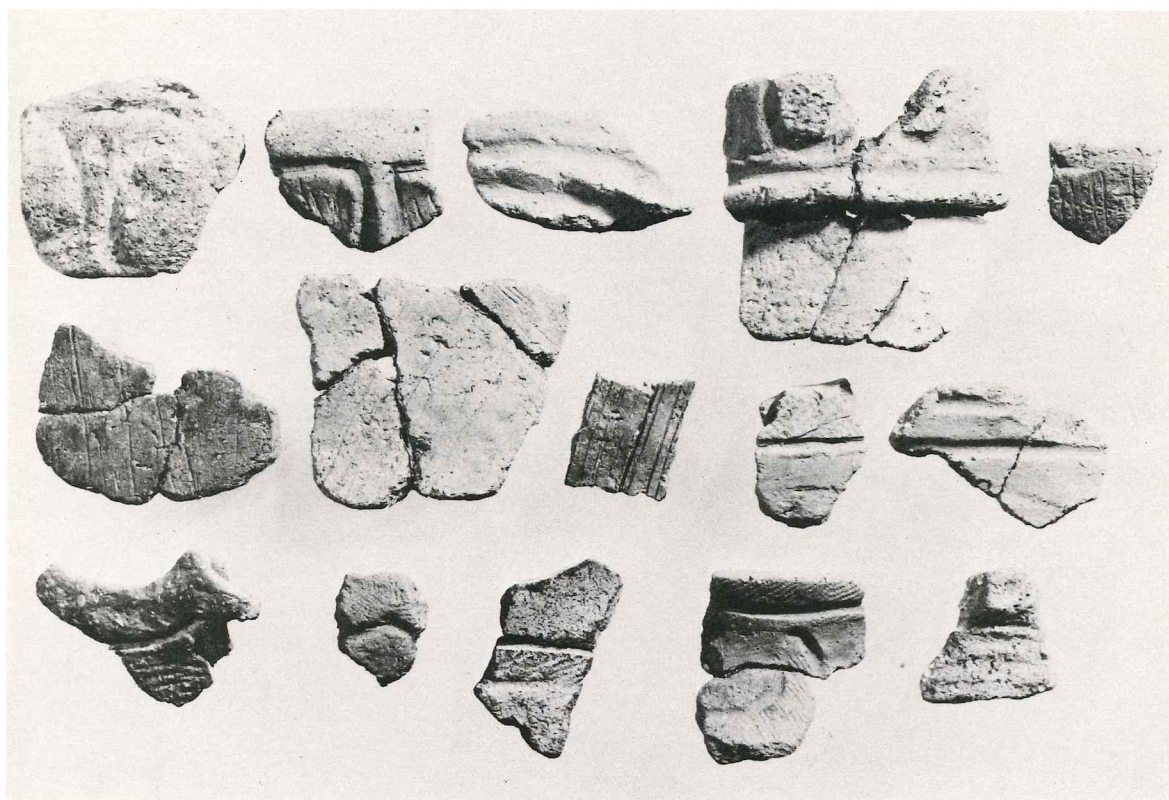
(B) 出土土器 —第16図 5 ~ 12—



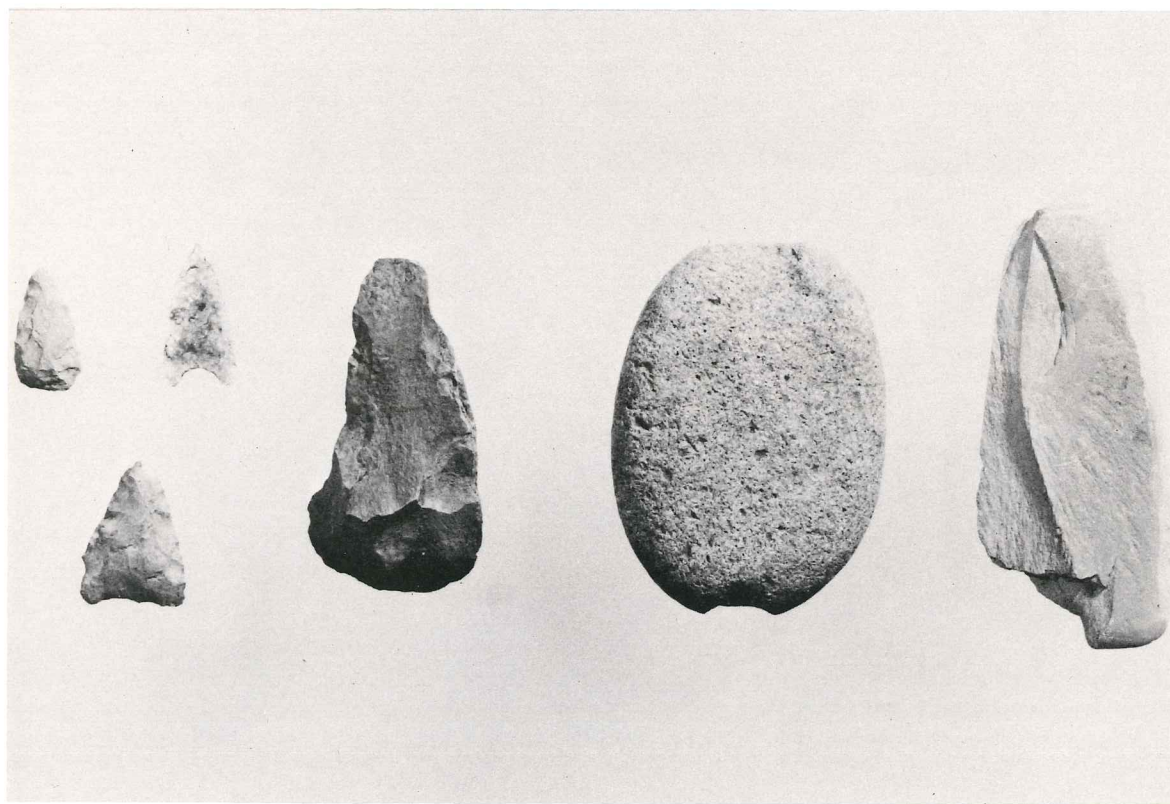
(A) 出土土器 —第16図13~28—



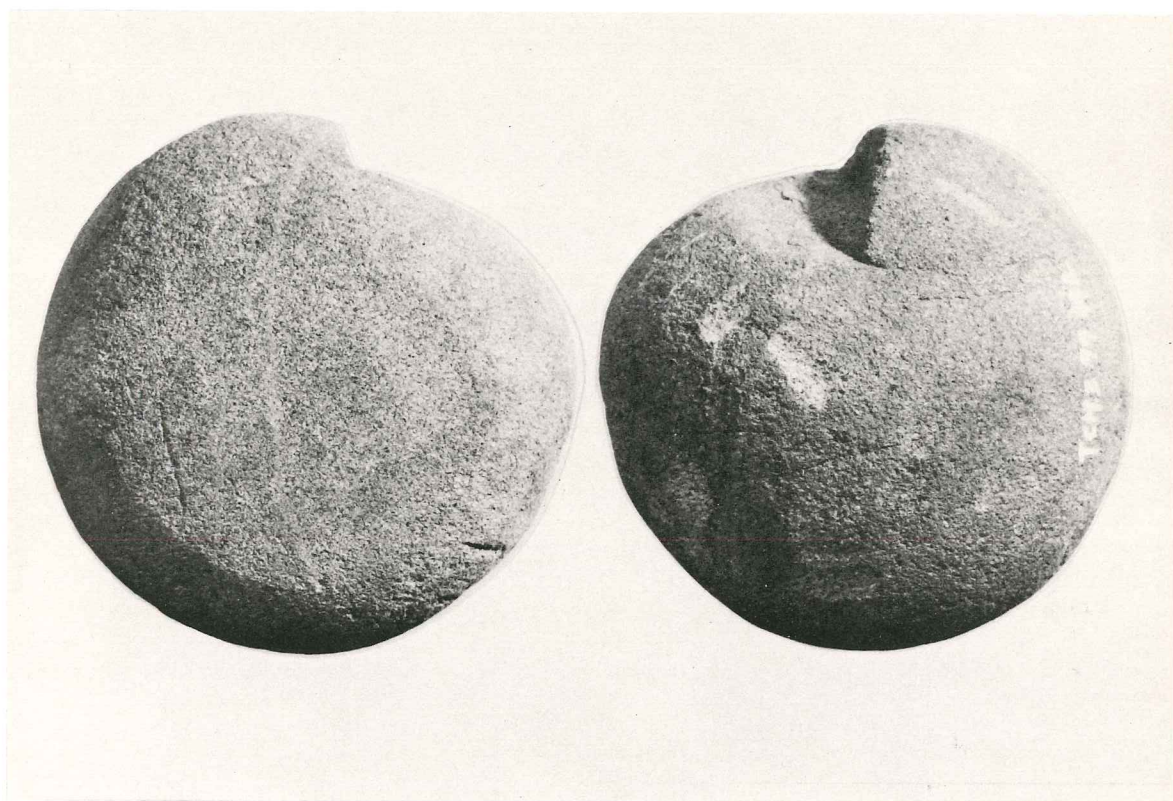
(B) 出土土器 —第16図29~48—



(A) 出土土器 —第17図49~63—



(B) 出土石器 —第17図73~78—



(A) 出土石器 —第17図79—



(B) 伝・丹生神社古墳(長者平20号墳)出土遺物

昭和55年度緊急発掘調査報告書

袋井市長者平遺跡

1981年3月31日

編集・発行 静岡県袋井市教育委員会©

印刷所 株式会社 開明堂